

目的 既報¹⁻⁵⁾においては、温熱的快適性の視点から着衣量を取り上げ、薄着の着衣習慣が健康に効果的にはたらくことを実証した^{3, 4)}。一方、その成果を着衣の多元的目的に視点をおいて評価するならば、冬期での薄着の実践が果たして、着衣の総合的快適感を満たす上で整合性があるのであろうかという問題が浮上してくる。そこで本報は、温熱的にかつ総合的に快適でありうるような着衣のあり方を追究しようとして、英国人との対比により、着衣の快適感に寄与する要因についての検討を行った。

方法 冬期におけるフィールド調査によって得た、性および年齢層別人数が同数の日本人事務職員（JW）および英国人事務職員（EW）各400名のデータを解析に供した。調査項目は、着衣の快適感、温熱的快適感、快適な着衣の条件に対する重視度、実測着衣量およびオフィス内気温などである。

結果 1) 着衣の快適感に寄与する要因は、数量化理論第Ⅱ類による解析の結果、着衣量、快適な着衣の条件に関する3因子の重視度、性、ナショナルティーおよびオフィス内気温などであった。重相関係数は0.75を示した。2) 他の要因の影響を消去した場合、着衣量が小さいことが着衣の快適性に寄与し、薄着習慣は着衣の快適感を高めることと整合性を示した。3) JWはEWより、また男子は女子より、温熱的に快適でありかつ、着衣が快適であった者の率が有意に低かった。この差に、上記した寄与要因の関与が明らかにされた。

文献 1)奥窪, 酒井, Irving: 織消誌, 27:532 (1986)。2)奥窪, 酒井: 織消誌, 27:539 (1986)。3)奥窪, 酒井: 織消誌, 28:123 (1987)。4)奥窪: 織消誌, 28:238 (1987)。5)奥窪, 酒井, Irving: 織消誌, 28:278 (1987)。